Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

122

幼児期のよりよい共同体形成を求めて

○石倉卓子　河崎美香　常川允子　中田良子　開 仁志　廣田仁美
（富山大学教育学部附属幼稚園）

１２年度から、「環境とともに生きる子ども」の姿をさらに解明していくため、「共同体が形成されていく過程」をサブテーマに掲げ、**人的環境に視点**を当てて研究をすすめてきた。

子どもは一人の力だけで成長しているのではなく、様々な環境で人とかかわり合いながら成長する。しかし、現代は人と人との直接的な触れ合いが減少し、一方では手を取り合わなければ解決しない問題が増えている。そこで、私たちは**子ども個人の育ち**だけではなく**共同体の育ち**という視点からも人間関係をとらえなおしてみたいと考えた。特に、家庭を離れて初めて集団生活を行う「幼稚園」で共同体の育ちを探っていくことは、社会的な人間関係の芽生えを探る上でとても重要であるととらえている。

◆　「共同体」って何？

私たちは「共同体」を**心理的なつながりをもつ人の集まり**ととらえ、共同体を２人の単位からみていくことにした。人と人が何かのきっかけで心がつながり、共同体が生まれる。共同体は目に見えるとは限らないし、離れていても心が何かでつながっていれば共同体と言える。「～し合う」ということを共同体の基本的な考え方とし、その最も基礎的な段階を「意識し合う」関係ととらえ、共同体の定義を**互いに意識し合って存在する集団**とした。また、どのように互いが意識し合っているかで、その共同体の特徴がみえてくるのではないか、とも考えた。

また、「めざす共同体像」を、**自分を生かし、他者を受け入れながらともに育ち合う集団**とした。ズレや葛藤を乗り越えることで共同体が育ち、「理解し合う」「認め合う」「支え合う」などの関係に変化していくと考えている。

◆　共同体を構成する要素

事例研究や文献研究を重ねていく中で、共同体を構成する要素として、**場の共有、コミュニケーション、意味の共有**の３つがみえてきた。

＜場の共有＞　「場」とは、“その子が意識している範囲”とした。Ａちゃんが意識している場とＢちゃんが意識している場に重なりができ、互いが影響を及ぼし合い、意識し合っている状態を「場を共有している」ととらえた。

＜コミュニケーション＞　言葉や行動、表情などによって自分の気持ちを表現し、気持ちを伝え合うことのできる手段である。

＜意味の共有＞　“一つの物や出来事に同じ意味を見いだすこと”ととらえた。しかし、意味を共有できない場合は、相手との間に**ズレ**が生じ、それに気付いて何とかしようとすると**葛藤**が生じる。トラブル場面が代表的な例である。

実際の生活の場では、共同体が形成されていく過程において、場の共有、コミュニケーション、意味の共有の３つの要素がそれぞれに変化し、複雑に絡み合っていくと考えている。

ここで年少児の事例を挙げて説明する。

普段、何か言いたいことがあっても黙ってしまうことの多い**なみ**が、日頃あまり遊んだことのない友達に初めて話しかけた事例である。

「藤づるのブランコ ゆらしてください！」（6月）

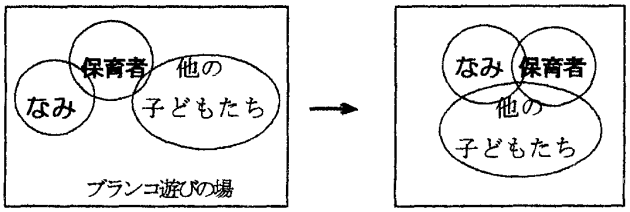
年少組の子どもたちが、藤づるのブランコに一人ずつ乗って遊んでいた。始めは保育者も一緒に揺らしていたが、一通り揺らしてその場を去る。すると、子どもたち同士で揺らし合うようになる。しばらくして、**なみ**が「先生揺らして！」と大声で保育者を呼ぶ。揺らしてくれる友達がいないらしい。保育者が「友達に頼んでみたら？」と言うと困った顔をする。保育者が「『ゆらしてください』って言えばいいんだよ。」とうながすと、**なみ**は困った顔をしながらも息を大きく吸って目をつぶり、「ゆらしてください！」と大きな声で頼んだ。そばにいた子どもたちが「いいよ。」と言って**なみ**の背中を押した。

この事例では、保育者が**なみ**と場を共有し、励ましの言葉をかけたことや、**なみ**の『揺らして欲しい』という強い気持ちが、**なみ**と周囲の子どもたちとの関係を変化させている。**なみ**にとって、周囲の子どもたちが単に『そばにいる存在』から、『直接かかわらなければ

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

ならない存在』になり、自分の気持ちを相手に言葉で伝えることになった。その結果、**なみ**にとって周囲の子どもたちは『自分の思いを受け入れ、ブランコを揺らしてくれる存在』となった。ここでは場の共有、コミュニケーションが共同体の変容に大きくかかわっていると思われる。意味の共有については、子どもたちと保育者が一緒にブランコ遊びをすることで、「ブランコ」という物の意味の共有、遊び方の意味の共有などが自然に起こっている、と言える。



〈場の共有からコミュニケーションの形成へ〉

この事例では、**なみ**の周囲の子どもたちに対する意識の仕方が変わったことで、共同体の質も変化した。つまり、単に「遊び場を共にしている共同体」から「言葉を交わし触れ合う共同体」へと変化しているとも言える。

◆ 学年別にみる共同体の姿と保育者の援助

年少の時期は、今までとは環境が変わり、生活の場も大きく広がる。そして、保育者や友達と触れ合い、場を共有するところから、その存在を意識し、かかわりが生まれてくる時期である。そのため、自分の気持ちを出し、保育者や友達と場を共有することが楽しいと思えるような援助をすることが大切である。

年中の時期は、年少の時期に培った関係をもつ子どもや新しい園生活を始める子、初めての園生活を迎える子が混ざり合い、新たな関係が築きあげられる時期である。友達と一緒にいると楽しいという経験を通して、友達とつながりたいという思いが深まり、コミュニケーションを通してかかわっていく。そのため、自分の気持ちを出すことに加えて、相手の思いにも気づくことができるような援助が大切になってくる。

年長の時期は、年中の時期よりもコミュニケーションが活発になる。コミュニケーションを通して相手の思いに気づくことができるようになってきた子どもたちが、共通の考え方や目的をもって生活するようになる。また、保育者よりも自分を認めてくれる友達を求める時期でもあるため、子どもたちが理解し合い、互いの良さを知り、認め合えることができるような援助が大切になると考える。

また、学年にかかわらず保育者の姿勢として大切なことは、

- 子どもたち一人一人が、家庭、地域、幼稚園などで、どのような共同体を形成しながら生活しているのかを知ること
- 保育者は、どのような共同体を形成していきたいのかという願いをしっかりもつこと
- 保育者も共同体の一員であることを意識して援助すること

などである。

◆ おわりに

幼児の発達を支えるためには、保育者が幼児との間に信頼関係を築くことが必要であることは言うまでもないが、その上で、幼児が一人一人異なった発達の姿を示すことを理解して援助することが大切である。「違いこそが、共同の基本条件となっていく」＜池谷寿夫『教育からの離脱』青木書店＞とあるが、集団生活の中で一人一人が個性を確立し、相互に磨き合っていくところに学び合いや育ち合いもあるのだとわかった。

私たちは、共同体を２人の単位からみていくことで、その周りで影響し合っているものを意識できるようになった。多様な共同体がクラスや幼稚園の中で存在し、重なり合っている。それがまた一つの共同体として家庭や地域に存在する共同体と重なり合っている。性質や大きさの異なる様々な共同体が生まれては、変化していく。そう考えると、すべての人々が何らかの共同体に重層的に連鎖的につながり、絡み合って変化しているとも言える。また、一人の子どもに与える影響が、様々な共同体に影響を与えることにもなる。

このように、目には見えない影響やそれによって変化している関係をどこまで意識し、総合的にとらえ、願いをもって子どもにかかわっていけるかが問われる。また、保育者は、無意識のうちに様々な影響を受けたり周りに与えたりしていることもあるため、自分が行った保育のビデオなどを通して援助をみつめ、共同体の質の変化に気付いていくことが、幼児一人一人の行動を理解することにもつながると考える。

この研究は、保育者が行う援助が、様々な共同体にどのような影響を及ぼすのかを見つめる機会ともなった。保育者の成長が子どもたちの成長につながることを常に意識して、今後も共に育ち合える共同体を育んでいきたい。

NII-Electronic Library Service